
相思の華

猫目石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

相思の華

【Nコード】

N0939X

【作者名】

猫目石

【あらすじ】

話の流れからいって本来なら他の話を公開した後に出すべき作品です。

しかし、今が丁度、『彼岸花』の見頃の季節なので思い切って投稿しました。

天上の華よ

愛しい華よ

想いは溢れて汝が許に届く

我が想いは汝が許へ

汝が想いは我が許へ

惹き付け合い打ち寄せ合い

想いは何時しか相思の華となる

殺生丸が久方振りに天空の“狗姫の御方”の城を訪れた。
実際は有無を云わせず母君に呼び付けられたのであるが。
理由が何であれ、ともかくりんが喜んだのは云うまでも無い。

しかし来たと思ったら即、翌朝、邪見を供に阿吽に乗って城を飛び
立ち何処かへ出掛けてしまった。

ガッカリするりんに対し養母である“狗姫の御方”が、地上への散
策を提案した。

天空の城は文字通り空に浮かぶ城の為、りんの好きな地上の花は見
当たらない。

護衛の兵達に守られ相模と共に秋の地上に降り立ったりんの目の前に広がる一面の彼岸花の大群生。

比較的、寒い地方の為、暖かい地方よりも二週間ほど植物の開花が遅れるのだ。

その為、通常ならば秋の彼岸の頃に咲く彼岸花が、今、満開となっている。

赤い赤い花と茎の緑が織り成す鮮やかな色の対比。

その余りの鮮やかさに誰もが否応無く惹き付けられ目を奪われる。勿論、りんとして例外ではない。

「ワアッ、凄い！ 彼岸花がこんなに一杯咲いてるのって、りん、初めて」

「りん様、彼岸花は別名『曼珠沙華』まんじゆしゃげとも呼ばれるので御座いますよ」

「まつ、まん、まん・じゅ・しゃげって、どんな意味なの？ 相模さま」

「遙か遠い天竺^{てんじく}の言葉、梵語で“天上の華” という意味だそうです」

「エッ！ この彼岸花って“天上の華”なの？」

「はい、何でも法華経の『摩訶曼荼羅華曼珠沙華』から取った言葉だそうで御座いますよ」

「ほ、法華経？ ホーホケキヨ？」

「クスクス、りん様、それは驚びっくりの事で御座いましょう。法華経とは偉いお坊様の教えに御座います」

「フーーーーン、そうなんだ。りんは彼岸花って死んだ人に捧げる花だって教わったんだよ」

「そうですね、大和の国では何故か“死人花”や“幽霊花”などと呼んで忌み嫌う者も多いと聞き及んでおります。どちらにせよ『曼珠沙華』は今生の花と云うよりは来世を思い起こさせる花だからで御座いましょう」

「来世ってあの世の事だね。相模さま」

「ええ、移ろいやすい現世ではなく永久とわの安らぎを得ると云われている死後の世界の事に御座います」

「あの世か・・・りんのおつ母や、おつ父、兄ちゃん達が居る世界の事だね」

「りん様の御家族・・・確か、夜盗どもに、皆、殺されたと邪見殿に、お聞きしましたが」

「ウン、そう。殺生丸さまに会う大分、前の事だけだね」

「お辛う御座いましたでしょうに。そんな幼い内に御家族を全員亡くされるとは……」

「今もね……たまに夢に見る事が有るんだ。あの日、みんなが殺された夜の夢を」

ふと遠い目をして、りんが秋風に揺れる野原一面の曼珠沙華を見や
った。

想いは追憶の彼方に飛んでいるのだろう。

相模には幼いりんの境遇を想像する事しか出来なかった。

邪見との茶飲み話の際に聞き出した処によると殺生丸様に出逢った
頃のりん様は村人に虐待され言葉も話せなかったらしい。

自身も折檻され傷つきながらも異母弟の犬夜叉の鉄砕牙の攻撃で手
酷い傷を負った殺生丸様を介抱しようと近付いてきたらしい。

その驚くべき身の処し方、身動きも儘ならぬ手負いの獣とは云え妖
力甚大な大妖怪に。

もし殺生丸様がその気になれば、鋭い爪の一閃で呆気なくその幼い
命を散らしていただろうに。

でも、そんな無私無欲の心を持つりん様だからこそ、あの御方の万
年雪のような御心の内に入る事が出来たのかも知れない……。

りん達と入れ違いに筆頭女房の松尾が配下の女房衆と一緒に天空の
城に戻って来た。

「只今、戻りまして御座います、御方様」

「ウム、ご苦労だったな、松。」

「して、若様は？」

「フフ・・・仏頂面で“白妙のお婆”の許へ出掛けおった」

「りん様と相模殿・・・それに邪見殿も、見当たりませんが」

「りんは久し振りに殺生丸に逢えたと言うのに、あれが、即座に出掛けてしまったのが寂しかったのである。それで相模と一緒に暫し地上に降りて散策を楽しんでくるよう申したのだ。勿論、護衛はこの城でも指折りの腕利きの者を数名ほど付けておいた。りんに何か起こりでもしたら殺生丸が烈火の如く怒り狂うであろうからな。小妖怪か？奴は殺生丸の供をして一緒に出て行っただぞ」

「左様で御座いますか」

「りんの地上での散策先は殺生丸の帰路とかち合っており。あれが、りんの匂いに気付かぬ筈が無かるうよ」

「御二方の“逢瀬”を画策された訳で御座いますな」

「まあな、西国の尾洲と万丈から、こつも、毎日、引つ切り無しに書状が届いては堪らん。やいのやいのと矢の催促で責め立てられて流石の妾もウンザリしてきたわ。両名が書状で訴えてきた処によると殺生丸め、りん恋しさに、少々、箍が外れておるらしい。誰彼構わず己が妖気を撒き散らしおってな。おかげで小者どもは強すぎ

る妖氣に中^あてられて氣絶する者が続出しているそうだ。全く、困った奴よ」

「無理も御座いません。若様はりん様の御成長を今か今かとズツと何年も辛抱強く待ち続けてこられたので御座いますから」

松尾が、乳母^{めのと}として赤子の頃から面倒を見てきた己が主“狗姫の御方”を軽く嗜めるように言葉を継いだ。

「フツ・・・あの一途さは、一体、誰に似たのやら」

「さあ、どなたで御座いましょうね。案外、御方様似でいらつしやるのかも知れませんよ」

「冗談ではない。妾はあんな朴念仁ではないぞ」

そんな会話が“狗姫の御方”と松尾の間で交わされているとも知らず、同じ様にりと相模も野辺を覆い尽くす彼岸花を前に会話を交わしていた。

りんが当時の事をポツリポツリと話し始めた。

「あの夜、おっ父も、おっ母も、兄ちゃん達も、みんな、夜盗に斬り殺されたの。おっ母の胸に抱っこされてたりんだけが・・・生き残ったの。周り中、血だらけで怖くて怖くて声も出なかった。その後、本当に声が出なくなったの。一生懸命、喋ろう、喋ろうって声を出そうとしたんだけど・・・どうしても出なかった」

「殺生丸様が天生牙を使つてりん様を助けられた時、お声も出るようになつたとか」

「うん、そうなの。りん、狼に噛み殺されて死んだ筈だったのに気が付いたら目の前に殺生丸さまのお顔が見えてね。金色の目がお月さまみたいだなんて思ったの。あの夜も満月で月の光に殺生丸さまの銀の髪がキラキラ光つてとっても綺麗だった。天生牙で助けて貰ったおかげで、それまでの怪我也、みんな治つてて声も出るようになったの。りん、殺生丸さまには何時も助けて貰つてばかり。だから何時かチャンと恩返ししなくちゃ」

「もう、充分なさつてますよ」

「？りん、何も、してないよ」

「りん様は殺生丸様のお傍に“いらつしゃる”だけで宜しいのです。それだけで殺生丸様には充分なので御座いますよ」

「でもお・・・りん、本当に殺生丸さまに何も返せてないんだよ」

「では、この曼珠沙華、彼岸花を摘んでいつて殺生丸様に差し上げてはどうですか？」

「殺生丸さま、喜んでくれるかな？　いつも花を摘んで差し上げても受け取って下さらないし」

「大丈夫、この華ならば、きつと受け取って下さいますよ」

「本当？　じゃあ、一杯、摘んで城に帰ろっつ！」

相模の言葉にりんがはしゃいで彼岸花を摘み始めた。

一本、二本、三本と大事そうに束ねて胸に抱き抱える。

鶯色ひわの内掛けに散らされた色取り取りの菊の紋様に真紅の彼岸花が更に鮮やかな色を添える。

涼やかな秋風にりんの艶やかな黒髪が揺れて白桃を思わせる幼い顔立ちを引き立てる。

見守る相模が思わずつられて微笑んでしまいそうな程、りんの姿は、無邪気で愛らしい。

童女の頃のおどけなさはそのままに、りんの成長と同時に少しずつ膨らみ始めた可愛い蕾の花。

その蕾はいずれ花開く大輪の花の艶やかさを充分に予感させた。

（今でさえ、こんなにも可愛いりん様。成人されたらどんなに、お美しくなられる事か）

相模はりんの成長していく過程を見る度に、その将来の姿を思い描かずにはいられない。

あの日、帰還した殺生丸に伴われ西国城に連れてこられた幼い人間のりんを初めて見た。

恐らく、あの時、城に詰めて居た殆どの妖怪が感じていただろう腰を抜かさんばかりの驚愕と衝撃。

その日から今日に至るまで、殺生丸に、りんの世話一切を任され、面倒を見てきた相模にとって、りんは、実の娘にも等しい存在になっている。

りんにとっても相模は亡き母を思い起こさせる優しい女妖だった。吹き寄せる秋風の中に嗅ぎ覚えのある匂いが色濃く混じり込んでいる。

遙か彼方の上空を見上げれば相模の鋭い妖視が捉えたのは秋晴れの空の中、双頭の竜に跨る雄々しい白銀の大妖の姿と竜の尻尾に必死に掴まる矮小な御供の小妖怪。

間違いなく此方を目指して飛行して来ている。

それも疾風の如き速度で。

ゴオオ~~~~~

風切り音が辺りに響き渡るような凄まじい速さで迫って来る。

「りん様、御目当ての方がいらっしゃいましたよ」

「エッ！ 殺生丸さまがつ！ どっ、何処に？」

キョロキョロと周りを見回すりんに相模が上空を見るように促す。

「まだ、極々、小さくしか見えませんが西の空を見上げてご覧なさいまし。阿吽に騎乗なさった殺生丸様が物凄い速さでグングン近付いてらっしゃる様子が判ります。オヤオヤ、邪見殿は阿吽から振り落とされないように死に物狂いで尻尾にしがみ付いているようですね。アラアラ、涙で、お顔がすっかりグシャグシャですわ」

「ウ~~~~ン、りんには小さな点にしか見えないよ、相模さま」

「もう少しお待ちになればハッキリと見えて参りますよ」

相模の云う通り小さな点のようにしか見えなかった姿が近づくに従い、ドンドン大きくなった。

りん達から少し離れた場所に阿吽を降下させた殺生丸がフワリと地上に音も無く優雅に降り立ち近付いて来る。

りと相模の周囲を囲んでいた護衛達が、皆、その場に跪いて主君を恭しくお迎える。

失礼が有ってはならない。

妖怪世界にその妖在りと謳われる西国の国主にして最強の大妖怪、殺生丸。

天空の城の主“狗姫の御方”と闘牙王の間に生れた一粒種。

高貴な血筋を更に色濃く受け継いだ至高の御方。

大妖怪であらせられた父君や母君でさえ妖線は一筋のみ。

かの君の保持する妖力が如何に莫大である事か。

類に流れる二筋の朱の妖線が、それを証明する。

その圧倒的なまでの比類ない実力。

両親から受け継いだ甚大な妖力が比肩し得る者のない高い矜持が、断じて他の追隨を許さない。

「殺生丸さまっ！」

りんがいつもの事ながら、それはそれは嬉しそうに殺生丸の許に駆け寄って行く。

身に着けた鶺鴒色の内掛けのせいか一面の真紅の曼珠沙華の中、一羽の小さな鶺鴒が胸元に飛び込んで来るような不思議な錯覚をおこさ

せる。

りんが抱き抱えた彼岸花が血のように鮮やかに目を惹く。

「見て、殺生丸さま、凄く綺麗でしょう。この彼岸花は『曼珠沙華』とも云うんだって。相模さまが教えてくれたの。『天上の華』って云う意味なんだって」

大事そうに抱き抱えた曼珠沙華の花束を殺生丸に手渡そうとするりん。

いつの間にか側に来ていた相模が、りんの行為に口添えする。

「どうぞ、お受け取り下さいませ、殺生丸様。その花はりん様の“御心”その物。彼岸花が別名『曼珠沙華』と呼ばれる事は既に御存知でいらっしやいますね。ですが、この花は『天上の華』という意味以外にも他の意味を持っております。大和の国では、この花を『死人花』などと呼び忌み嫌う傾向が御座いますが、海を隔てた韓^{から}の国では『相思華』と呼ぶのだそうで御座います。（花は葉を思い、葉は花を思う）互いが互いを思い合う、それ故に相思の華『相思華』と。相愛の御二方に、これ程、相応しい花は他に御座いますまい」

それを聞いた殺生丸が徐^{おもむろ}にりんを両腕で抱き上げた。腕に抱いた一杯の曼珠沙華ごと。

「せつ、殺生丸さまっ！」

驚いたりんが殺生丸を覗き込めば無表情ながら何処か、愉^{たの}しげな口調で言葉が返ってきた。

「では、その花は、りん、お前が抱いているが良い。私がお前を抱けばその花も抱いている事になろう」

りんを抱き上げたままフワリと空中に舞い上がる殺生丸。

どうやら、このまま天空の城に戻る心積もりらしい。

阿吽に乗って疾風のように現れた時とは打って変わった緩やかな速度。

りんと散歩を楽しむかのようにユツタリとした速さで爽やかな秋空を飛ぶ殺生丸。

相模や阿吽、護衛の者達は付かず離れずその後を付いて行く。

主君と御寵愛の姫君との久方振りの“逢瀬”を邪魔しないように。

因みに邪見は嵐のような速度に耐え切れず、地上に辿り着いた途端に泡を吹いて悶絶。

そのまま阿吽の背中に乗せられて天空の城に帰り着くまで気が付かなかったそうである。

『曼珠沙華』の花言葉には「想うは、あなた一人」という意味がある。

了

【鶺鴒】ひわ・燕雀目の鳥の一種。スズメより小さい。

【鶺鴒色】ひわいろ：鶺鴒の羽のような黄緑色。黄色の勝った萌葱色。もえぎ

（後書き）

《『相思之華』そしのはな についてのコメント》

この作品は内容的には『白妙異聞』の続きとなっています。

（なろうサイトには、まだ出してません！）

目にも鮮やかな真紅の彼岸花、この花をモチーフに作品を書きたいと調べてみると、この『曼珠沙華』には“天上の華”という神聖な意味に相反する「死人花」や「幽霊花」などという不吉な意味が。尤も、この不吉な意味は日本人のみの連想です。

欧米では盛んに園芸品種が開発され今では白、黄色の花弁を持つ物もあるそうです。

更に調べていく内に韓国では、この花を「相思華」と呼ぶ事も。

（相思＝互いに思い合う）こんな素晴らしい題材を使わない手は有りません。

早速、題名に使わせて貰いました。

何と素敵な意味を持つ花でしょう。

血の色を思わせる鮮やかな色彩、気高さを感じさせる美しい形状、花の持つ深い意味、あらゆる点で“殺りん”にこれ程相応しい花は他に無いと思います。

いつその事、曼珠沙華を『殺りんの花』と命名したい程、気に入ってる管理人、猫目石です。

2007・10/2（火）

猫目石

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0939x/>

相思の華

2011年10月7日15時19分発行